発問例

●二四〇ページ

問 **「僕」はなぜ、総理大臣に電話したのか。**

答 駅員の言っていた「政治のこと」という言葉に何か根拠があるのではないかと思い、手がかりを求めようとしたから。

●二四一ページ

問 **「それが歴史なのですよ」（4 行目）というのは、どういう意味か。**

答 形のあるものは必ず失われ、その代わりのものが新しく出来上がるという、そのサイクルのあり方が歴史なのだということ。

問 **「神様だってなくなります。」（6 行目）とは、どういうことか。**

答 人々の信仰も変化していき、ある時代までさかんに信仰されていた神も、信仰されなくなると消え去ってしまうということ。

問 **「それが経済なのですよ」（10 行目）というのは、どういう意味か。**

答 何かがなくなれば新しいものをまたひとつ作ればいいということ。

補 現代的な消費社会の様相を示している。

問 **⊙「どこまでも通りを歩いた。」（11 行目）とあるが、「僕」のどのような気持ちを表しているか。**

答 「僕」には二〇〇〇年の到来という「一生に一度」の区切りに意味が見いだせないほど青が消えたことに動揺し、しかもその喪失感を誰も受け止めてくれないために、「どこまでも」孤独な気持ちを抱えたまま解決の糸口がないことを象徴的に表している。

補 元恋人をはじめ、「僕」以外の人々が、やがて来る「新しいミレニアム」の瞬間を心待ちにしながらパーティーを開いたりしている描写があったことと対比してみたい。大半の人々は、世界から青が消えたことなど気にも留めず、さらに、国の代表である総理大臣の合成音声は青の消滅を仕方のないことだと回答したため、ますます「僕」は行き場のない孤独感を抱くのである。

問 **最後の「僕」のつぶやきが、太字（ゴシック体）で表記されているのはなぜか。**

答 青がないことに最後までこだわっているのは「僕が好きな色」だったということを強調するため。好きになる・好きでいるといった心情が、かけがえのない生をも示唆している。

補 「好き嫌いに関係なく歴史は進む」という総理大臣の言葉も参考にしてみると、ここでの「僕」のつぶやきが周囲と正反対の生き方を示唆している点に注意したい。

語句の研究

●二四〇ページ

6 コンピューター・システム　地下鉄の駅員が言った「中央コンピューター」のことかどうか不明だが、総理大臣が直接回答してくれるかのようなコンピューターソフトが開発され、公衆電話からも通話可能であるという設定である。ここもＳＦ的な近未来社会が想定されるところである。

10 白鳥は哀しからずや…　若山牧水作の有名な短歌である。教科書二六九ページ参照。総理大臣としてのコンピューターは「青が消えた」という「僕」の訴えについて連想した短歌を話しているのだろうが、ここでの「僕」の立場はこの短歌の「白鳥」に例えることもできよう。自分の周囲の雰囲気などにひとりだけ染まらず、人々と一緒に新世紀を祝う気持ちになれない「僕」の孤立した状況を暗示しているとも読み取れる。

●二四一ページ

4 それが歴史なのですよ　コンピューターの回答は実に単純な答えである。事物が変化し、次々と消滅していくことの果てしのない反復が歴史なのだというのは、まずは一種の進歩史観と言えるだろう。

5 石油だってなくなります。ウラニウムだってなくなります。　石油はもちろん重油を指すだろうし、ウラニウムは原子力の資源として述べていよう。つまり、エネルギー資源の枯渇の問題を指摘しているわけである。もしそれらがなくなれば、当然他の代替エネルギーの開発が課題となる。

5 コミュニズム　共産主義。私有財産の否定と共有財産制の実現によって貧富の差をなくし、平等な社会を実現しようとする思想・運動。マルクス、エンゲルスによって体系化された。一九一七年、ロシアで起こった十月革命でソビエト社会主義共和国連邦が成立。世界初の共産主義国家であった。しかし、一九九一年十二月に崩壊。ちなみに本作品が発表されたのは一九九二年である。超大国ソビエトの政権が崩壊したことを受けて、このように表現されていると考えられる。

6 ジョン・レノン　元ビートルズのメンバーで、グループ解散後は旺盛にソロ活動をしていた。平和運動などにも積極的に関わり、メッセージ性の強い歌詞で数々のヒット曲を作っていたが、一九八〇年にニューヨークの路上で凶弾に倒れた。

6 神様だってなくなります。　十九世紀末のドイツの哲学者フリードリヒ・ニーチェの著作「ツァラトゥストラはこう言った」の冒頭部に「神は死んだ」という言葉がある。ニーチェの最も有名な言葉である。

10 それが経済なのですよ　ある物が次々となくなっていくことそれ自体が歴史だと言い、次に一つなくなったら、また新しく一つ作ればいいと言う。そのサイクルを消費と生産と捉えれば、それこそが経済だというのである。大量消費、大量生産の時代を極端に語っていることになろう。

キー・ポイント　それは僕が好きな色だったのだ。　最後に小声でつぶやく僕の言葉は、「僕の好きな色」という表明である。生産と消費のサイクルに否応なく巻き込まれ、先を争って生きているような人々と正反対の生き方を示唆する言葉が「好き」という言葉である。あらゆるものの進化や、時間自体の停止を含意する「好き」という心情に注意したい。何物かを好きでいる状態は、どういう心理と思考と生き方を導き出すだろうか。日々失われていく物があまりにも多い現代、その失った物にはいったいどういう意味があったのだろうか。今一度振り返って考えてみたいところである。孤立した状況の中で、それでも自分の「好き」をみつめる眼差し。その時に立ち現れてくるものは、かけがえのない「個」としての自分であるといえるだろう。